

放射線と向きあう看護

—第5回日本放射線看護学会学術集会 印象記—

別所 遊子

Bessho Yuko

平成28年9月3、4日に、東京都目黒区の東京医療保健大学で、第5回日本放射線看護学会学術集会が開催された。本学会は、広島と長崎で原爆被爆者の医療を経験し主に医療の場で放射線と関わってきた看護職が、福島の子原子力発電所事故を契機に地域や産業の場へと活動を拡大する必要性を痛感し、活動の学術的根拠を追究するために平成24年に設立された。

今回の学術集会のメインテーマは「放射線と向きあう看護」で、看護職として放射線と人に向き合うかを、さまざまな角度から切り込んでいく企画となっていた。草間朋子学術集会長（学会理事長）の講演では、放射線看護学は放射線利用に伴って、公衆・医療・職業被ばくを受ける可能性のあるすべての人々の安心・安全を確保するために、自律的な看護実践を行うに必要なエビデンスを「つくり」「つたえる」ことであり、そのためには多くの学協会との連携・協働と看護職の教育が重要であると述べた。このテーマは、日本放射線技術学会および日本保健物理学会と共催のシンポジウム「放射線看護学の確立に向けた学際的なコラボレーションのすすめ方」で論じられた。シンポジストの白石順二氏（日本放射線技術学会）は、放射線看護学の確立に向けたエビデンスの構築には、防護具の効果等放射線計測による研究を他学会と協働して行うこと等が重要であると述べた。横山須美氏（日本保健物理学会）は、学会の活動を紹介し、患者や地域の人々の身近にいる看護職には、放射線への理解を促進するためのリスクコミュニケーション、地域に根差した放射線防護の知識をもつための教育・研究および他学会との情報共有を期待すると述べた。岩波由美子氏（がん放射線療法看護認定看護師）は、放射線

治療部門での看護師の配置等の理由から困難もあるが、医師、放射線技師等と協働することで看護の視点が強化されるので、今後は放射線治療部門内外の他職種、研究・教育機関等と連携して放射線治療看護の研究を進めたいと述べた。加藤知子氏（東京医療保健大学）は、放射線医療に携わる医師、診療放射線技師を対象とした調査結果から、放射線診療において看護師には造影剤等の副作用の早期発見、患者の急変時の対応を期待する、また、放射線診療、原子力災害時の看護職自身の防護方法が適切でない等の回答があったことを報告した。小西恵美子氏（前学会理事長）は、本学会の目標と成果を踏まえて、今後は放射線看護を実践するための教育コース、他学会・専門職団体との協働、放射線看護学における看護とは何かを追究することが重要であると述べた。

第一日目には、特別講演「放射線防護と看護の接点」で、元東京医療保健大学教授（現原子力規制委員会委員）の伴信彦氏が、放射線防護と看護の両分野における活動の経験から、放射線看護学は人を支える学問として *evidence*（学術的根拠/客観的データ）、*integration*（知見の統合/他分野との交流）、*simplicity*（単純体系/分かりやすい体系）、*empathy*（共感/納得）が重要であり、放射線防護も看護もその人らしい生活を取り戻すために何ができるかを考えることが大切であると述べた。

2日間の参加者（実数）は550人を数え、研究発表（口演と示説）は、大きく放射線診療に関するセッションと原子力災害に関するセッションに分けられた。前者には「安全対策」「技術開発」「副作用軽減対策」「患者への情報提供」等があり、患者の心身の看護に関するものから、患者の被ばく防護、



写真1 特別講演（伴氏）



写真2 ポスター発表

チーム医療における連携など幅広い内容で、放射線診療の手法や装置に応じた看護の新たな試みも報告されていた。また後者には「住民支援」「被ばく防護」「原子力災害教育」等があり、保健師が行う避難者の保健指導・相談、乳幼児を育てる母親への支援、自治体の災害訓練への関わり等、被災後に住民が直面している健康や生活の問題に、時に戸惑いながらも積極的に向き合う保健師、看護師の姿を示している内容であった。その他に看護職の基礎・現任教育における「放射線教育」に関する演題が目立っていた。

本学会の発足と並行して、長崎大学、弘前大学、鹿児島大学では、放射線看護に携わる専門看護師の養成を目指して平成22年度から順次、大学院の修士課程に放射線看護専門看護師コースを開設してきたが、平成27年度に日本看護系大学協議会で正式に認定された。本学術集会では、特別企画と交流集会で、教育と認定の経緯と、修了生3名の活動報告および将来展望が熱心に討議された。

また、本学会のユニークなプログラムとしてワークショップ「放射線に関する演習」があった。参加者は、自然放射線の測定/霧箱、外部被ばくの放射線防護、ポータブルエックス線撮影装置を用いた実験、ホールボディカウンターによる測定実験の4つのテーマから1つを選んで実際に測定を行い、結果の意味を考えて、放射線の存在と特徴を体験する機会となっていた。参加者がグループに分かれて熱心に測定し、結果について解釈している様子が印象的であった。



写真3 ワークショップ

この他のプログラムとして、教育講演の「発がんリスクと予防対策」（大阪大学 祖父江友孝教授）と「放射線治療入門～知っておきたい基礎知識と最前線～」(国立病院機構東京医療センター 萬篤憲放射線科医長)は参加者が非常に多く、会員のニーズを満たす内容であったと推測された。

本学会は比較的若い学会であるが、多彩なプログラムが同時進行するそれぞれの会場で、大勢の参加者が熱心に発表を聞き、意見を交換している様子から強い熱気を感じられ、学会が今後社会のニーズに応じて、医療や地域で活動の範囲を広げ、その存在意義を高めてゆくであろうと期待される2日間であった。来年の日本放射線看護学会学術集会は、9月2、3日に名古屋で開催される予定である。

(東京医療保健大学)